

錢形平次捕物控

第廿七吉

野村胡堂

青空文庫

一

「親分、変なことがありますよ」

八五郎のガラツ八が、なが長い顔を糸瓜棚へちまだなの下から覗かせたとき、

銭形の平次は縁側の柱にもたれて、粉煙草をせせりながら、あかと赤

蜻蛉んぼの行方ゆくえを眺めておりました。この上もなくのんびりした秋

のある日の夕刻です。

「びつくりさせるじゃないか、俺は糸瓜が物を言ったのかと思つたよ」

「冗談でしょう。糸瓜がまげ鬚を結つて、意気なあわせ衿を着るものですか」

ガラツ八はその所謂いわゆる意気な衿の衣紋えもんを直して、ちよいと結い立ての鬚節に触つてみるのでした。

「だから、変なんだよ。糸瓜が鬚を結つたり、意気な衿を着たり

——」

「まぜつ返しちやいけません」

平次とガラツ八は、相変らずこんな調子で話を運ぶのでした。

「じゃ、何が変なんだ、そこで申上げな」

「その前に煙草を一服」

「世話の焼ける野郎だ」

平次は煙草盆を押しやります。

「恐ろしい粉だ。ほこり埃だか煙草だか、嗅かいでみなきや解らない」

「贅ぜいたく沢を言うな」

「相変らずですね、親分」

ガラツ八は妙にしんみりしました。江戸開府以来と言われた名御用聞の銭形平次が、その清せいれん廉さの故に、いつまで経ってもこの貧乏から抜け切れないのが、平次信仰で一パイになっているガラツ八には、不思議で腹立たしくてたまらなかったのです。

「大きなお世話だ。粉煙草は俺が物好きで吞むんだよ。——それよりもその変な話というのは何なんだ」

「根岸の御隠ごいんでん殿裏の市太郎殺しの後日物語があるんで——」

「下手人でも判ったのか」

「あればかりは三輪みのわの親分が一と月越し血眼で捜しているが判り

「ませんよ」

「じゃ、何が変なんだ」

「親分に言われて、この間から気をつけていると、あの家の下女——お菊という十八九の可愛らしい娘が、毎日浅草の観音様へお詣りまいをするじゃありませんか」

「信心に不思議はあるまい。日参をして岡つ引に睨にらまれた日にや、江戸に怪しくない人間は幾人もいないことになるぜ」

「それが変なんで」

「娘が綺麗すぎるんだろう」

「その綺麗すぎる娘が、観音様にお詣りおみくじをするだけなら構わないが、必ず御神籤おみくじを引くのはどうしたわけでしょう」

「毎日が」

「一日も欠かしません。その上、引いた御神籤を八つに畳んで、におうもん仁王門外のくめ糸の平内様のへいない格子にこうし結わえる」

「毎日同じことをやるのか」

「あつしがつけてから十日の間、一日も欠かしませんよ。降つても照つても」

「時刻は？」

「巳刻よつ（十時）からこのつ午刻（十二時）の間で」

「待ちな、元三がんさんだいし大師の御神籤には忌日きにちがあるものだ。日も時も構わず、毎日御神籤を引くのは、いくら小娘でも変じやないか、

八」

「だからあつしが変だと言つたじやありませんか——糸瓜に齧を結わせたり、意気な衿を着せたのは親分の方で——」

「そんなことはどうでもいい。——その娘は誰かと逢引をする様子はないのか」

「根岸から真つ直ぐに来て、真つ直ぐに帰りますよ。もつとも、ときどき、変な野郎が娘の後をつけている様子ですがね、振り向いても見ませんよ」

「変な野郎？」

「若くてちよつと渋皮のむけた娘の後をつけるんだから、どうせまともな人間じやありません」

「お前もそのまともでない人間の一人だろう」

「へッ」

「ところでその娘は、引いた御神籤をていねいに読むのか」

平次の問いは妙なところへ立ち入ります。

「丁寧にもぞんざいにも、見ようともしませんよ」

「フーム」

「そのまま八つに畳んで帯のあいだへ挟んで、御神籤所からだんだんを降りて石畳を踏んで、仁王門を出て、桑の平内様のお堂の前へ立って、帯のあいだから先刻の御神籤さつきを出して格子に結わえるんで」

「その手順に間違いはないだろうな」

「毎日同じことをやるんだから間違いつこはありません。よほど

念入りな願をかけるんでしょね」

「面白いな八、明日は俺が行つて、娘の所作しぐさを見極めよう。そい

つは何か理由がありそうだ」

「ヘエー、親分が乗出すんですか。——三輪の親分が氣を揉もんで、

見境もなく人を縛りますぜ」

「そんなこともあるまい」

平次は相変らず赤蜻蛉あかとんぼの乱れ飛ぶのを眺めながら、鉄拐てつかいせん

仙人にんのように粉煙草の煙を不精らしくふか燻すのでした。女房のお

静は、貧しい夕食の仕度に忙しく、乾物ひものを焼く臭いが軒に籠こもりま

す。

根岸は隠殿裏の武家出らしい母娘おやこの家へ曲くせもの者が忍び込んで、用人あがりの中老年人、市太郎というのを斬つて逃げうせたのは、もう一と月も前のことでした。

母親の女主人は浪乃なみのといつて、三十五六の少し陰気ではあるが立派な婦人。娘は十二三で、殺された市太郎老人は五十を越したばかり、そして美しい下女——というよりは、お腰元らしいお菊というのは、十八か九で、こればかりは五月の陽のような明るく美しい娘でした。

引越して来たのは去年の暮、ひっそりとした暮しようで、西

国の武家出とばかり、氏うじも素性もわかりませんが、近所の評判もよく、店舗みせも確かで、何の仔細しさいもなく過しているうち、今からちようど一と月前、ある夜曲くせもの者が忍び込んで、入口の六畳に休んでいる市太郎老人を斬り殺し、奥へ踏込むところを、折よく外から帰って来たお菊の声におどろいて、何にも盗む隙ひまもなく、そのまま逃げてしまったというのです。

検屍けんしも滞りなくすみましたが、下手人げしゆにんは何としても挙がりません。そのとき家の中に居たのは、殺された市太郎の外には、女主人の浪乃と、小さい娘の早苗さなえと二人きり。娘は風邪の気味で早寝をして何にも知らず、奥にいた浪乃は怪しい物音に飛んで出ると、市太郎を殺した曲者は、裏口から入って来たお菊の声に驚い

て取るものも取らずに逃げうせたのでした。市太郎の傷は前から頸筋くびすじを突かれた一と太刀で、お菊が帰ったときはまだ虫の息があり、断末魔ながら、主人の浪乃を伏し拝むようにしていたということだけは解っております。

表の格子戸は内から乱暴に外され、六畳一パイの血の海です。土地の御用聞三輪の万七は、時を移さず乗込みましたが、まるつきり下手人の見当もつかず、そのまま愚図愚図と一と月という月が経ちました。そのあいだ係りの同心の勧めで、銭形の平次は呼出されましたが、一応現場を見ただけ、三輪の万七に義理を立てたか、あまり口を出さずに帰ってしまい、その後は三輪の万七にも内証ないしよで、子分の八五郎に、そつと見張らせて、情勢の変化を

眺めていたのです。

その八五郎が、美しい下女のお菊の動静を見張っているうち、浅草の日参と、御神籤と、おみくじ 桑のくめ 平内へいない様の格子の謎を見付けたのです。

「親分、出かけましょうか」

翌る日の朝、まだ飯も済まぬうちに飛んで来たのは、勢い込んだ八五郎でした。

「たいそう早いじゃないか」

「でも根岸から観音様に廻ると、昼近くなりますよ」

「そいつは正直すぎるだろう、御神籤所を見張っただけでたくさんだよ」

だが、このガラツ八の馬鹿正直さが、平次のために、いろいろのことを発見してくれるのでした。

観音様にたどり着いたのはちょうど巳刻（十時）頃、二人は絵馬を眺めたり、鳩に餌をえさやったり、ざっと半刻（一時間）ばかり待っている——、

「親分、来ましたよ」

ガラツ八はそつと平次の袖を引きました。

見るとちょうど仁王門を入って来るのは、平次にも見覚えのあるお菊という可愛らしい下女。鳩にも五重の塔にも眼をくれず、真つ直ぐに段を登つて、大賽だいさいせんばこ銭箱の前に立つと、赤い紙入を出して、小銭をつま摘んでポイと投げ、鈴の緒おに心持触れて、双掌もうてを

合せたまま、ひた拌みに拌み入るのでした。

「ちよいと、可愛らしいでしょう」

「黙っている」

鼻筋の通った、ふくよかな横顔をガラツ八は指します。

「親分」

「何だ、うるさいな」

「あれがまともでない人間で——」

振り返ると段の中ほどのところに立って、不精らしく懐ろ手を
したまま、凝^{じつ}と娘の様子を見ているのは、渡り中^{ちゆうげん}間らしい様
子をした中年男です。

「なるほど」

「あ、娘は御神籤を引いていますよ」

「しッ」

下女のお菊は御神籤を引くと、別段それを見るでもなく、八つに畳んで、もう一つ中ほどから折つて帯のあいだへすべり込ませました。

そこから御堂を出て、石畳を渡つて仁王門を出るまで、娘の取済ました顔は、一度も四方あたりを見ません。段の中途からそれを見詰めていた人相のよからぬ男も、平凡な日程を繰り返すような静かさで、どこともなく姿を消してしまいました。いや、どうかしたら、物蔭からそつと眼を光らしているかもわかりませんが、境内にはざつと見渡したところ、怪しい人影もなかったのです。

お菊は糸の平内様の堂の前に立つと、これも事務的な冷静さで、帯のあいだから先刻の御神籤を取り出し、堂の格子へ器用な手付でざつと結びました。

「四方を見ようとしな。——おそろしい胆きもの据すわった娘じゃないか」

錢形平次がそう言った時、お菊はもう平内様の堂を離れて、伝でんぽういん法院の横の方へ、美しい鳥のように姿を隠すのでした。

そのときどこからともなく現れた先刻さつきの怪しい男、お菊の跡を見え隠れにつけて行く様子ですが、お菊はそれを知っているのか知らないのか、相変らず振り向いて見ようとしません。江戸の賑わいを集め尽したような浅草の雑沓ざつとうは、この意味もなく見え

るささやかな事件を押し包んで、活きた坩堝るつぽのように、刻々新しい沸たぎりを巻き返すのです。

三

「ここまで見て、お前は引揚げたんだろう」

平次はガラツ八のぼつとした顔を顧みました。

「あの娘をつけてみましたが、御隠殿裏へ真っ直ぐに帰るだけで、何の変哲ありませんよ。江戸の真ん中じゃ、真昼の天道様に照らされて、どんな送り狼おかみだって、業わざはできません」

ガラツ八は長い顎あごを撫なでるのです。

「何を言うんだ。娘のことじゃない。あれだよ」

「へエ——」

平次は桑の平内様のお堂を指しながら続けました。

「あの格子に、たくさん御神籤おみくじが結んであるだろう。縁結びのまじないにされているんだ。古いの新しいの、勘定しきれないほどあるが、たった一つ変ったのがあるはずだ」

「？」

「端っこをちよいと紅べにで染めた御神籤だよ——天地紅の御神籤なんかどこのお寺へ行つたつて出るものじゃない」

「へエ——」

「あの娘は観音様の本堂からここまで来るあいだに、御神籤の端

を染める暇がなかったはずだ」

「？」

「だが、あの御神籤は前には無かったことは確かだ。やはりあの娘が結わえたんだ。——間違いはない。いま引いた御神籤を、読みもせずに平内様の格子に結ぶはずはないから、やはり帯の間に細工さいくがあつたに違いあるまい。あの赤い御神籤は、家から用意して来たんだろう」

「へエ——。手数のかかる細工ですね」

「それどころじゃない、娘は赤い御神籤を結ぶとき、前にあの格こ子うしに結んであつた、青い印のある御神籤を解いて持って行つたよ。

——それに気が付かなかったのか」

「本当ですか、親分」

ガラツ八は見事に十日間娘に馬鹿にされていたのです。

「赤い印や青い印の付いた御神籤は、何百何千の中でも一と眼に解るよ。俺は先刻ここへ来たとき、確かに見定めておいたから間違いはない」

「へエー」

「驚いてばかりいずに、あの赤い御神籤を解いて来るがいい。青いを見なかったのは手ぬかりだが、なあに、赤いのを見ただけでも、大体の当りはつくだろう」

そう言ううちにもガラツ八は、平内様の堂の格子から、お菊が結び捨てて行った、赤い印のある御神籤を解いて来ました。

「こいつは樂じやありませんね、親分。皆んながジロジロ顔を見るんだ」

「心配するなよ、泥棒と間違えられっこはない。——男のくせに縁結びのまじないなどをするのは、どんな野郎だろうと思われるだけのことさ」

「な悪いや」

「おやおや、やはり御神籤だ——たぶん昨日引いたのへ書き込んで今日持つて来たんだろう。『第廿七吉、禄を望んで重山なるべし、花紅なり喜悅の顔、か。——病人は本服すべし、待人来るべし——』そんな事はどうでもいいとして、見事な筆跡てで書き入れがしてあるよ。『当方無事、あと三日のあいだ、命にかえて頼み

入る』と」

「それは何の事でしよう、親分」

「判らないよ」

「驚いたなア、親分が判らなかつた日にや、天道様にだって判るわけはねエ」

「馬鹿なことを言え。——ところで、もう赤い御神籤を取りに来る刻限だろう。これを元の通り格子へ結んでおいてくれ」

「へエ」

「いやな顔をするな。——精いっぱい縁結びに取憑とりつかれていますよ
うな顔をするんだ」

「驚いたなア」

ブウブウ言いながらも、八五郎は赤い御神籤を、元の格子に戻しました。

それからほんの煙草を二三服した頃、

「それ見るがいい。お前みたいな、縁結びに取憑かれている野郎が来たじゃないか」

平次が指した糸の平内様の格子の前に、威勢の良い男がフラリと立ちました。まだ若そうな着流し、やぞう弥蔵が板について、ほつかむ頬冠りは少し鬱陶うつとうしそうですが、素知らぬ顔で格子から赤い御神籤を解く手は、恐ろしく器用です。

「捕まえましょうか、親分」

「馬鹿、御神籤泥棒じゃ引っ立てばえもあるまい。——黙って後

をつけるんだ。落着く先を見極めさえすれば、わけもなく眼鼻がつくよ」

「それじゃ親分」

「抜かるな、八」

「なアに、二本差でなきや、たかが知れていますよ」

八五郎はヒラリと身をひるがえすと、怪しの男が平内様の堂を離れるのと一緒にした。二人は仲見世の人混みの中を縫って、雷門の方へ泳いで行くのを、平次は何か覚おぼつか束ない心持で見送っております。

四

その晩、平次の家へ戻つて来たガラツ八の八五郎は、申分なくさんざんの態ていでした。

「あ、驚いた。親分の前だが、あつしはまだ、あんな野郎に出つくわしたことはありませんよ」

自分の鬚まげ節ぶしは横町の方に向いて埃ほこりをかぶり、意気な衿あわせはしま目も判らぬほど泥まみに塗れて、全身いたるところに傷だらけ、それがお勝手口からコソコソとでも入ることか、町内に響き渡るような声を張上げて、平次のいわゆる大玄関に、立ちはだかるのです。

「何という恰好だい、裏へ廻やつて泥だけでも落すがいい——お静、俺の衿を出してやれ、一番野暮やぼなのがいいよ、身につかないもの

を着るとろくなことはないから」

口小言をいいながらも、ともかくも男振りだけでも直して、長火鉢の前に据^すえました。幸い傷は摺^すり剥^むきと引つ搔きだけ、生命に別条のあるのは一つありません。

「驚いたの驚かないのって、こんな目に逢うと知ったら、親分も一緒に行つて貰うんでしたよ」

ガラツ八の仕方話は始まりました。

赤い御神籤^{おみくじ}を取つた怪しの男をつけて行くと、駒形から、お蔵前を、両国へ出て、本所へ渡つて、深川へ廻つて、永代を渡つて、築地へ抜けて、日本橋から神田へ、九段を登つて、牛込へ出て、本郷から湯島へ来ると、日はトツプリ暮れたということです。

「腹ごしらえはどうした」

平次は訊きました。

「吞まず食わずですよ。塩煮餅しおにもちを買う隙ひまもありやしません。恐ろしく足の達者な野郎で、うっかりすると姿を見失います。でも半日歩きつづけて、上野へ来たときは二人ともヘトヘト、歩いてるんだか、這はつてるんだか解りやしません」

「馬鹿だなア」

それが平次の深甚しんじんな同情の言葉でした。

「谷中やなかへ入った時、あんまり癩しやくにさわるからとうとう武者ぶりつきましたよ。このまま続けた日にや、夜の明ける前に参ってしまふ。何糞なにくそで、いきなり御用ツと来ましたね。——威勢よくやつ

たつもりだが、口惜くやしいことに声が出ねえ。半日吞まず食わずじや、ろくな唾つばだつて出やしませんよ」

「それからどうした」

「二つ三つねじ合つたと思うと、——口惜くやしいがこの通り、手もなくやられましたよ。藪やぶの中へ投ほうり込んで、『あばよ』だつてやる。親分の前だが、口惜くやしいの何のつて——」

ガラツ八は手放しのまま、ポロポロと涙をこぼすのです。

「馬鹿野郎ッ」

平次の声はりんとしました。

「……………」

「なんだつて夜つぴて後を跟つけなかつたんだ」

「へエー」

「へエ、じゃないよ。齧^{かじ}り付いたら、雷^{かみなり}鳴が鳴つても離さないのが岡つ引のたしなみだ。見ればガン首も手足も無事じゃないか」
「へエ」

「それとも何か動きのとれない証拠でも押えて来たのか」

「お生^{あいにく}憎様で」

「お生憎様てえ奴があるか、馬鹿だなア」

平次もとうとう噴き出してしまいました。

「もう一度行きますよ、親分。明日は姿を変えて平内様のお堂の前に頑張つて、三日分ばかり兵^{ひょうろう}糧を背負つてつけたらどんなもので——」

「勝手にするがいい」

ガラツ八は頭を抱えて飛出しました。その晩のうちに、大坂へ行くほどの仕度を整え、翌る日早々浅草へ乗込んだことは言うまでもありません。

五

その翌る日、ガラツ八は見事に使命を果しました。

「親分、大変ッ」

大変の旋風せんふうが飛込んだのは、戌刻半いっつ（九時）少し廻った頃。「さア来たぞ。今晚あたりはその大変が降りそうな空模様だと思

つたよ」

平次はそれを期待していたのでしよう。

「昨日と異つて敵に覺ちがられずに見事に後をつけましたぜ。相手が浅草から真つ直ぐに巢へ行つたんだから間違ひはないでしよう」

「その巢はどこだ」

「本所相あいおい生町の裏長屋で」

「それから」

「一日頑張つたが、それつきり出て来ませんよ。あの風体だから、見落すはずはないんだが——」

「お前と同じことだ、姿を変えて出たんだろう」

「あつしもそれに気が付いて、いきなり飛込みましたよ。すると、

大時代の婆アが一人、念仏を称えながら商売物の姫糊ひめのりを拵こぎえて
いるじやありませんか」

「それからどうした」

「さんざん脅おどかした末、とうとう口を割りましたよ。あの曲者とい
うのは親分、驚いちゃいけませんよ」

「誰が驚くものか。——二千五百石の大旗本、駒形にお屋敷を持
つていま長崎奉行をしていらつしやる、久野将しょうげん 監様の家来、
先ごろ殺された用人進藤市太郎の倅勝之助せがれという男だろう」

「どうしてそれを親分」

ガラツハの驚きようは見事でした。

「お前が三十里も歩くあいだ、俺はジツとしているはずはないじ

やないか。あのお菊という娘を脅かしたり、すかしたりこれだけのことを言わせるのに二日かかったよ」

「人が悪いなア、親分」

ガラツ八は少しばかり不服そうです。

「まあ怒るな八、何でも判りさえすればよかったんだ。二人とも判ったんだから、^{うら}怨みっこはあるまい」

「それつきりですか、親分」

「まだいろいろのことが判ったよ。手っ取り早く言うと、主人の久野将監様がお役目で一年前から長崎へ出張、異人との掛合いに骨を折っているのに、駒形の留守宅では、^{おのさぶろう}叔父の深田琴吾^{きんご}というのが、家来の山家斧三郎と腹を合せ、^{めかけ}お妾のお新という女を立

てて、奥方の浪乃様を、いろいろ難癖をつけて屋敷に居られないように仕向けた。お気の毒なことに奥方の浪乃殿は、お里方が絶家して帰るところもなく良人將監殿が江戸へ帰るまでは、滅多に死ぬわけにも行かない。跡取りの謙之進様——十歳になったばかりのを屋敷にのこし、十二歳のお嬢様早苗様というのと、お腰元のお菊、それに用人の市太郎をつれて、根岸の御隠殿裏の貸屋に籠った——不義の汚名を被せられ、親類一党から義絶された奥方としては、こうするよりほかに工夫はなかった」

平次の話はつづきました。

根岸に籠った奥方は蔭ながら屋敷にのこした倅謙之進の上を案じ、女の智恵の及ぶ限りの工夫をこらしてそれを守護しました。

腰元のお菊と、用人進藤市太郎の倅で、屋敷に踏止まった勝之助が、青と赤の印の付いた御神籤おみくじを交換して、わずかにお互の無事を知らせ合い、いろいろしめし合せて来たのは、行届きすぎる悪人どもの監視の眼をくぐり、その毒計に対抗して、家と若君との無事を計る苦衷だったのです。

主人将監は長崎のお役目が済んで、いよいよ三日の後には帰ることになりました。その三日さえ無事に過せば、奥方の無実を言い解く道もひらけ。若君謙之進の身も安泰になるでしょう。が、悪人のあせりようも一段猛烈をきわめて、その三日を無事に暮せるかどうか、はなはだ覚束おぼつかない有様になっていることも事実でした。

「親分、そう聴いちや放っておけません、乗込んで行きましょう」
 「馬鹿なことを言え、町方の岡っ引が、二千五百石のお旗本の屋敷へ乗込めるわけではない」

平次の悲しみはそこだったのです。いかに証拠が山ほど揃って
 も、武家屋敷の塀の中までは、町方の手は届きません。

「口惜しいじゃありませんか、親分」

「だが、たった一つ」

平次は深々と考え込みました。

六

明日はいよいよ主人将監しょうげんが帰るといふ日、銭形平次はとう

とう青い御神籤の曲者——実は久野将監の家来進藤勝之助を本所相生町あいおいの隠れ家に突き止めてしまいました。最初はさんざん白っぽいくれましたが、ぐんぐん突っ込んで行く平次の問いに追い詰められて、

「それじゃ、どうしろというのだ。——拙者はいかにも進藤勝之助、仔細しさいあつて姿を変えたところで、町方役人に文句を言われる道理はあるまい」

意気な裕あわせの前をキッチンと合せて進藤勝之助は四角に坐るのでした。二十二三のまだ若い苦味走った良い男、腕にも分別にも申分のないのが、侍の地が出ると、さすがに冒し難いところがあり

ます。

「進藤さん、そう打ち明けて下さると何よりありがたい——。あつしの申すことを聴いて下されば、あなたの親御——市太郎様を殺した相手も教えて上げましょう」

「父親を討ったのは、誰だ。まずそれから聴こうじゃないか」

「いえ、それは一番後で申上げます。それより、親御様市太郎様は、奥方様の御味方ですか、それともお部屋様方ですか、あなたは御存じでしょうね」

「……………」

勝之助の顔色はサツと変りました。

「私から申上げましょうか。——父上市太郎様もさいしよは奥方

様の御味方だったに相違ありません。が、フトしたことから悪人どもに悪い尻を押えられ、後には次第次第にお部屋様方に味方するようになり、亡くなる頃は、動きの取れない悪人方になっておりました。——あなたがそれを、どんなに心苦しく思われたかもうよく解っております」

「……………」

勝之助はジツと膝に眼を落しました。この一年間、悪人方に転落して行く、心の弱い父の姿を見ることが、どんなに凄まじい苦痛だったでしょう。

「ところが、亡くなった後に残る、父上市太郎様の汚名は何となさいます」

「父の汚名？」

「悪人どもは悉く細工ことごとさいくをしてしまいました。明日江戸御帰府の殿様に御覧に入れるため、あなた様の父上市太郎様を奥方不義の相手に拵え御親類方にまで披露の手筈てはずになっております」

「それは本当か」

勝之助の顔はもう一度変りました。

「父上市太郎様の懺悔ざんげじょう状を作り、山家斧三郎がそれを持っております。今夜はたぶん深田琴吾、お部屋様などと顔を合せ、最後の手筈を定めることとでございましょう」

「どうしてそれが解った」

「お菊の言葉や、父上市太郎様の最期の様子、奥方のお言葉の端

々からそれくらいのごことは察しました。それに駒形のお屋敷には一昨夜から、三人のちようじゃ課者を入れ、出入りの商人はことごとく調べ上げてしまいました」

平次の周到さは、たった二日一夜の間に、早くも事件の全貌ぜんぼうをつかみ、を掴んでしまったのでしよう。

「……………」

「あつしの申すことが本当か嘘か、今晚お屋敷の内のどこかに、三人の悪人が相談しているところを突き止め、その話の様子が少しでもわかれば、何もかも分明になります。その上で、御隠殿裏の奥方様の御隠れ家にお出で下されば、親御様の敵かたきの名を申し上げます。——宜よろしゅうございますか、進藤様」

平次は念を押しました。この青年武士を用いるよりほかに、悪人どもの企たくらみを知る工夫はなかったのでしょうか。

「よし、確しかと引受けた、その代り」

勝之助は青白い顔を挙げます。屈辱と義憤に、ワナワナと頬が顫ふるえます。

「万一私の申すことが嘘でしたら、平次の首を差上げましょう——と申しても張合いのないような私でございます。こうしましう。私の見込みが外れたら、今晚かぎり十手捕縄を返上し、この齧節を切ってお詫わびいたしましょう」

「よし、確しかと言葉を番つがえたぞ」

勝之助はフラフラと立ち上がりました。

この後のことは、長々と書くと際限ありませんが、ざっと筋だけを通すと、その晩進藤勝之助は、深田琴吾、山家斧三郎の二人の悪者を取って押えて、御隠殿裏の奥方の隠れ家に飛込んで来たのでした。

「平次殿、——一言もない。まさに察しの通り、悪人どもは亡き父一人に悪名を負わせ、明日は帰府の殿を欺く企みであつた。あまりの事にその席に飛込んで、かくの通り。残念ながらお部屋様は取り逃したが」

「とうとうやりなすつたか、進藤様。——御心中御察し申します。しかしこれより外に、御家安泰の道はなかつたでしょう。見事父上の過失を償つぐなわれました」

平次は挙げかけた手を膝に置いて、奥方の方を振り返るのです。

「ところで、父の敵だ。約束通り、教えて貰おうか、平次殿」

勝之助の膝は、きつと平次の方を向きます。

「申しましょう。——父上市太郎様の敵は、何を隠そう、父上御自身」

「何？ 何と言う」

「父上市太郎様は、身を恥じて自害をなすつたのです。それを庇かばつたのは、ここに居られる奥方様と、お女中のお菊さん。万一自害と知れては、父上様の非をあば発くことになりました。咄嗟とつさの間にお二人で相談して、刀を隠して格子戸を外し、曲くせもの者が外から入って父上を害あやめたことに取り繕つたのです。それに間違いはな

いでしような」

「……………」

奥方浪乃はうな垂れたまま涙を拭き、女中のお菊は眼をあげて、大きくうなずきました。

「よく判りました。親の敵を討とうとしたのは、この勝之助の浅はかさでございました。それでは、私はこのまま退転いたします。奥方様には、今夜のうちに駒形のお屋敷にお帰り遊ばし、明日は晴れて殿様の御入府をお迎え遊ばすよう」

勝之助は畳にもろて双手を落すのです。ハラハラと膝を洗うのは、若さと純情さにあふ溢れる涙でした。

「ありがとう、勝之助、何もかもお前のお蔭。——折があつたら

帰っておくれ。——殿様へは、私からよく申します」

奥方は蒼白い顔を挙げました。激情に顫ふるえますが、限りなく上品な美しさです。

「では、奥方様」

「お待ち、これは、せめても私の志」

奥方は手文庫から、持もち重おもりのする金包を出して、ひた泣く勝之助に押しやります。

後には貰い泣きのお菊と平次。——ガラツ八の八五郎も隣の部屋で大きく鼻を吸すっているのです。

*

明る日は奥方浪乃、屋敷に帰つて良人久野将監しょうげんを迎え、事
 件の顛末てんまつを、人を傷つけない程度に報告しました。妾めかけのお新が、
 そのまま行方知れずゆくえになったことは言うまでもありません。

一件落着の後、ガラツ八の八五郎は、

「市太郎は本当に自害したんですか、親分」

割り切れない顔を平次にブチまけるのです。

「自害なものか、立派な下手人げしゅにんがあるのさ」

「ヘエー」

「奥方だよ」

「ヘッ」

ガラツ八はさすがに胆きもをつぶします。

「用人の進藤市太郎は、さいしょ悪人に引き摺ひずられたが、美しい奥方と一緒にいるうち、本当に悪い望みを起して、奥方に無礼なことをしたのさ、——末期まつごの苦しい息の下から、奥方の方を拝んだと聴いて俺は大方察したよ。それにあの格子戸は外から曲者があけて入ったんじゃないくて、内から無理に外したのだ。多分お菊の細工だろう。刃物を隠したのもお菊かな。あの娘は恐ろしく伶俐り巧こうだよ。——それに味噌みそ播すり用人でも何でも武士たる者が、正面から曲者に咽喉のどを刺されるという間抜けな法があるものか。——誰も曲者の顔を見たものがないというのも考えるとおかしいことだよ。——俺は最初からあの奥方が怪しいと思つていたんだが、素

姓が判らないから手のつけようはなかったんだ。お前に見張らせたのはそれが知りたかったからだよ。あわてて奥方を縛るとんだことになるじゃないか」

平次はこう説明するのです。お菊と勝之助とのあいだは青と赤の御神籤を通して結ばれた。ほのかな親しみの始末については、いずれ勝之助が久野家に帰参の上、平次の橋渡しで何とかなるとでしよう。

青空文庫情報

底本：「銭形平次捕物控（十四）雛の別れ」嶋中文庫、嶋中書店
2005（平成17）年8月20日第1刷発行
底本の親本：「銭形平次捕物全集第十七卷 権八の罪」同光社磯
部書房

1953（昭和28）年10月10日発行

初出：「オール讀物」文藝春秋社

1942（昭和17）年11月号

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：noriko saito

2019年10月28日作成

2019年11月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控

第廿七吉

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>